

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ①)

高島 敬明

1.はじめに

私は、昭和42年(1967年)の4月に土木技師として物流会社のN社に入社し、一年間物流研究所で研修を重ねました。配属先は一般物流と違って超重量物の輸送、据付、プラントの建設などを行う少し特殊な「重機建設部」となり、現場での建設工事に従事することになりました。

入社当時は、北海道全域で橋梁架設の工事、札幌高速道路の橋梁工事、苫小牧新港の石油精製工場などのプラント建設工事とゼネコン顔負けの仕事に従事するなど経験を重ね、昭和51年(1976年)、31歳の時に名古屋支店に転勤になりました。名古屋支店は時代の趨勢もあり、大型の海外工事が多い店で、当然海外勤務も多かったのです。私は、海外勤務の希望があり仕事の適不適も考慮されたのかこの店に配属されたようです。そのような中、旧ソ連(ソビエト社会主義共和国連邦、1922年建国～1991年崩壊)での仕事の話が出ましたが、社内では非常に注目されたプロジェクトでした。社内では人選に入ったわけですが、ロシア語の話せる人はいません。そして共産圏でもあり、かつ地域的にも経験者はおらず、適任者がなかなか見当たりませんでした。会社はベテランの作業班長を同伴させることにして、全く白紙の私、高島を指名し、決着を見ました。海外への希望を持っていた私は、内心嬉しく思ったものです。

2.海外出張

さて、この「A.ソ連、LX-プロジェクト」を皮切りに、「B.ナイジェリア国、カドナリファイナリー」、「クウェート国、KCPCリファイナリー」と私が経験した仕事、生活の中での「愉快だったこと」「馬鹿げたこと」「危険だったこと」等を壮年期の人生を捧げた一コマを生きた証として「海外

出張の思い出」と題して、徒然なるままに書き綴ることにいたします。

A.ソ連、LX-プロジェクト機器据付工事

- 場所=黒海北辺のノボロシースク市
- 期間=1977～78年(昭和52～53年)
- 工事内容=カスピ海から油送管で運ばれた原油を、黒海でタンカーに積むための岩壁設備の建設工事(岩壁の配管と船を結ぶ「く」の字形の伸縮配管ローディング・アーム^注)の直径は28インチ(約71mm)で当時世界一と言われていた。

3.日本出発からクラスノダールまで

桜の便りが出始めた頃、名古屋を離れ東京秋葉原の本社で最後の打ち合わせを終わらせ、約1年の予定で妻子を残し黒海沿岸の都市・ノボロシースクに向かいました。その頃、共産主義国家としてのソ連は、ゴルバチョフのペレストロイカの少し前であり経済は疲弊し、人心は荒れアルコール中毒が多くて問題になるような時代でもありました。1ドルが300円、1ルーブルが1ドルでした。赴任に当たって、営業から教えられた、100円ライター、パンスト、その年の残っていたカレンダーなど現地には無くて安いものを、プレゼント用に持って行ったのを懐かしく思い出します。

飛行機は、羽田発のアエロフロート機でモスクワまでの直行便でした。当時は行きは9～10時間、帰りは偏西風の関係で8時間かかると言われていました。夜の10時頃に離陸した飛行機は、絵に描いたような佐渡島の上空を通過し、30分後にソ連の海岸線に達し、ウラジオストックをさらに北上し、中国領の北を真西に進路をとって雪を被った山々そして真っ白い氷の上を飛び続けました。広いと思っていた日本海の狭さに驚き、何時

間飛んでも真っ白い山々や氷原の大陸にそして町らしい明かりも見られない広大な大陸にはただただ驚くばかりです。

翌朝によやくモスクワのシェレメチョボ国際空港に到着し、入国審査に臨みました。入国審査は厳しく、びっくりしました。審査官はなぜか国境警備兵だそうで

す。薄暗い部屋に通され、そこで軍服、軍帽の兵隊が日本の昔の机に置かれた電球のスタンドのようなもので、ライトを調整しながら私の顔に当て、上目遣いに見る光景は今でも脳裏から離れません。作業員は問題なく通関できましたが、引率者の私への取り調べは非常に厳しいものでした。持込現金のこと、宗教のこと、いろいろな角度から立ったり座ったりして質問を受けました。

ロシア語と英語で調べられましたが、私は教えられたように英語はしゃべれない、わからないと日本語だけで押し通しました。審査官もあきらめたのか1時間後にやっと解放してくれました。最後にゲートを通過して皆が待つ待合室に入っていると、黙り込んで心配していた全員が安堵の表情を見せ、と同時に拍手が起こりました。この瞬間皆との一体感ができたような気がして、胸が熱くなったのを思い出します。

国際空港から乗り換えて、今度は2000キロメートル南のクラスノダールまでローカルの旅になります。国内線はロシア人がほとんどで全員少し緊張しました。早速最初のトラブルが発生しました。私の座席のシートベルトが片方無いのです。もう一人もベルトが無くて身振り手振りで抗議したのですが、スチュワーデスは「ヤポニマイ!」(どうしよ



うもない)と首をすくめ手を開くばかりです。満席ですし、結局我々をほったらかしで着陸までそのまま飛行しました。ちょうど日本で自衛隊の戦闘機と旅客機とのニアミスが騒がれ

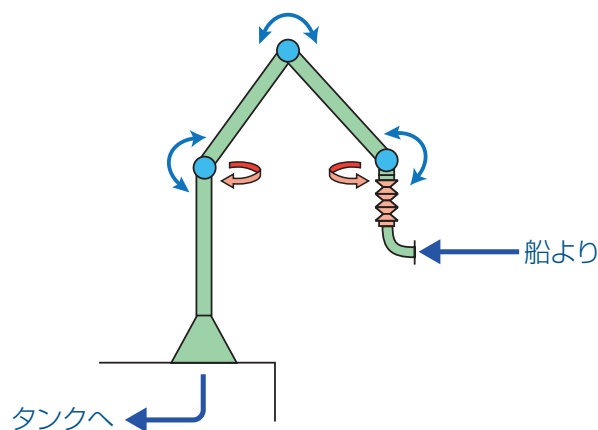
ていましたが、何となく機外を眺めていたらソ連の戦闘機が下から斜め上に向かって主翼すれすれに通過していきました。その大きさとパイロットの顔も見えたような気がしましたが、とんでもな

い国に来てしまったと思いました。後で我々の頼りない通訳(女性)の話では、よくあることだそうで旅客機を目標に訓練しているとのことでした。樺太沖の大韓航空機撃墜事件も納得した次第です。

いろいろと危険な目にも遭いましたが、素敵なおスチュワーデスと3時間を共にし、無事にクラスノダール空港に着陸しました。(続く)

■注

ローディング・アーム: LNG(液化天然ガス)やLPガス(液化石油ガス)等の原料を輸入し、陸揚げする際に、陸側から船側の積み出し用取り合いフランジ(継ぎ手)へ配管を接続し、その配管を用いて陸側タンクへ受入を実施している。このときに用いる配管をローディング・アームという。(図ともWeblio辞書より抜粋)



ローディング・アーム概略図